1. 事前掲載記事

10月28日掲載　毎日新聞（神戸版）

2008年（平成20年）10月28日（火）　毎日新聞

交通事故遺族らトーンチャイムの練習に励む

来月15日のシンポで演奏

「死者ゼロ」への願い込め

10月31日掲載　産経新聞

交通犠牲者ゼロへ〝風〟起こす

遺族ら来月大阪でシンポ

黄色い風車1000カ所に供えたい

11月12日掲載　読売新聞

2008年（平成20年）11月12日（水曜日）　読売新聞

事故死ゼロへ車社会考える

大阪でシンポ

交通事故犠牲者の家族らでつくる自助団体「TAV交通死被害者の会」は15日午後一時半から、シンポジウム「交通死ゼロをめざして」を大阪市阿倍野区民センターで開く。参加無料。

国連が定めた「世界道路交通犠牲者の日」（11月第3日曜日、今年は16日）を前に、犠牲者を追悼し、被害をなくすためには車社会がどう変わればいいのかを考える。

追悼セレモニーのほか、交通安全活動に取り組む遺族らが意見交換する。問い合わせはTAV事務局の米村さん（06・6382・7225）へ。

11月12日掲載　朝日新聞

交通死撲滅へ遺族らシンポ

15日、大阪で初開催

交通事故の被害者遺族でつくる「TAV交通死被害者の会」（大阪市北区）が15日、遺族らの体験談やパネル討論などを通して「交通死ゼロ」を訴えるシンポジウムを初めて大阪市内で開く。

国連の「世界道路交通犠牲者の日」に合わせた行事で、内閣府などとの共催。犠牲者の追悼式では、同会会員らの家族17人の遺影が映し出され、遺族1人が体験を語る。パネル討論には、遺族や研究者ら8人が参加、狭い道を安全な道路に変える「ソフトドライブ」の普及や横断中の歩行者の事故を防ぐ「歩車分離式信号」の促進などについて、意見を交わす。同会事務局の米村幸絢さん（58）は「交通死は遺族だけの問題ではない。家族をなくし、悲しみに見舞われる前に、みんなで対策に取り組んで犠牲者をゼロにしたい」と話している。

催しは午後一時半から、阿倍野区の区民センター（阿倍野区阿倍野筋4丁目）で、入場無料。手話通訳もある。問い合わせは事務局の米村さん（06・6382・7225）へ。

（千種辰弥）

11月12日掲載　毎日新聞（大阪市内版）

澄んだ音色で"ゼロ"願い込め

遺族らが「トーンチャイム」演奏

交通死被害者の会 15日にシンポ

11月15日掲載　日経新聞

交差点 歩行者守る信号に

「交通犠牲者の日」遺族ら訴え

「車と分離 普及を」

きょう大阪でシンポ

2. 事後掲載広報

11月16日掲載　朝日新聞

交通死ゼロへ 遺族らシンポ

交通事故の被害者遺族らでつくる「TAV交通死被害者の会」（大阪市北区）主催のシンポジウム「交通死ゼロをめざして」が15日、同市阿倍野区で開かれ、全国から約260人が集まった。遺族は「犠牲者は未来を奪われ、家族は生きる希望を失う。悲しみを繰り返さない社会をつくろう」と訴えた。

国連が11月の第3日曜日を「世界道路交通犠牲者の日」と定めたのにちなんだ初の催し。事故で長男を亡くした京都市の小児科医、今井博之さん（51）が講演し、道路ごとに細かい制限速度を設定するなどスウェーデンが取り組む政策「ビジョンゼロ」を紹介した。パネル討論では、大学教授や遺族が制限速度を超えて走れない車「ソフトカー」の開発や、横断中の歩行者の事故を防ぐ「歩車分離式信号」の普及活動を説明。社会全体で交通死撲滅に取り組む重要性を話し合った。（千種辰弥）

11月16日掲載　読売新聞（大阪版）

■交通犯罪の根絶を誓う

国連が定めた「世界道路交通犠牲者の日」（16日）にちなんだシンポジウム「交通死ゼロをめざして」が15日、大阪市内で開かれた。遺族らでつくる「TAV交通死被害者の会」が初めて主催。約250人が参加し、パネル討論などを通じて交通犯罪の根絶を誓い合った。

冒頭、犠牲者の追悼式典も営まれ、2002年、大型トレーラーによる事故に巻き込まれ、家族3人を亡くした阪口玲香さん（33）（愛知県弥富市）が遺族を代表してあいさつ。「残された家族も、生きる希望を失ってしまう。悲しみが繰り返されない社会を願っている」と訴えた。

11月16日掲載　産経新聞

交通事故死ゼロめざせ

阿倍野で遺族らシンポ

交通事故で肉親を失った家族らが、交通事故死のゼロをめざすシンポジウムが15日、大阪市阿倍野区の区民センターで初めて行われた。出席した約250人が車社会のあり方について考えた。

シンポは世界保健機関（WHO）が提唱する11月第3日曜の「世界道路交通犠牲者の日」を前に「TAV交通死被害者の会」（西淀川区）が実施した。10歳の長男を事故でとくした今井博之さん（51）が基調講演。スウェーデンの取り組み「ビジョンゼロ」を引き合いに「安全性を犠牲にした移動はありえないというのが本来の姿」と訴えた。

パネル討論では、交通安全に取り組む市民団体の代表者や大学教授らが出席。事故防止のために交差点を車と歩行者に分けて通行させる「歩車分離信号」の導入や、制限速度を守るために車と運転者に換算対策などについて議論した。

11月17日掲載　毎日新聞

2008年（平成20年）11月17日（月）　毎日新聞

「交通死ゼロ社会」を

被害者の会　遺族がシンポで訴え

阿倍野

「交通死ゼロ社会」を願いトーンチャイムなどを演奏する人たち

16日の「世界道路交通犠牲者の日」（11月の第3日曜日）に合わせて、交通事故遺族らでつくる「TAV交通死被害者の会」（大阪市北区）などが15日、同市阿倍野区で「交通死ゼロ社会」の実現を目指すシンポジウムを初めて開いた。約250人が参加し、「運転手のセーフティー向上や交通システムの改善で死亡事故はゼロにできる」と訴えた。

02年に福岡・長崎の大型トレーラーが渋滞の列に突っ込んだ事故で、長男岩望君（当時6歳）ら家族3人を亡くした愛知県弥富市の阪口玲香さん（33）が遺族を代表して「心情を述べた。速度を超過しないよう制御された「ソフトカー」や歩車分離信号の普及に向けた提言、遺族によるトーンチャイムの演奏などもあった。【阪口浩之】